



## 松村奈奈子 新連載

仕事以外の文章を書くのは久しぶりで、緊張して書きました。初めての対人援助マガジンなので、少し自己紹介を。

医師になってずっと病院勤務でしたが結婚をきっかけにやめて、今は児童自立支援施設や支援学校、児童相談所などの嘱託医などをしています。

病院勤務時代はなかなか長期休暇もとれなかったのですが、時間ができたことで、旦那ともゆっくり旅にも出かける事ができるようになりました。最近では夫婦でポーランドにハマって年に1度訪れています。

さらにうずうずしていた好奇心が芽をだして、同じ好奇心の強い幼なじみとアラフィフ2人組で数年前から、軍艦島を訪れたり、ダイアログインザダーク(ネットですぐ検索できます。暗闇の中で不思議な体験)に参加したり、今週末もちょっとかわった美術館に行く予定などなど、好奇心を満たす日々でもあります。

マガジンでは仕事でのこれまでの体験を書いてみる予定ですが、本当は旅行記や不思議体験記なども書いてみたい気持ちがうずうずしています。

## ガヴィニオ重利子 新連載

はじめまして。京都出身で、現在はスイスに暮らす臨床心理士のガヴィニオ重利子(がびにお えりこ)と申します。どうぞよ

ろしくお願いします。生粋の関西人ながら結婚で姓を変え、少々読みにくい名前でも生活するようになりました。

日本では、主にスクールカウンセラーやキンダーカウンセラーとして、学童期のお子さんとその親御さんとともに仕事をさせてもらっていました。こちらでも同じような仕事に就きたかったのですが、資格制度の違いなどにより心理援助職として施設などで仕事をするのは難しいことがわかり、今年2月から、それまで思いもなかった個人開業という道を選び、日々奮闘しています。

「心理士」という10年以上親しんできたタイトルをこちらでは使わせてもらえず、現在は「カウンセラー」として州政府の開業許可を受け臨床活動をしています。たかがタイトルされどタイトルで、心理士と名乗れなくなることは、私にとって思った以上の喪失感を掻き立てるものでした。打ちひしがれて身動きとれなくなる時期もあったのですが、それらの経験を通して「自分は何をしたいのか」「私にとっての心理援助とは一体何なのか」ということを以前よりも強く自問するようになったように感じています。そのような折、日本で仕事を共にした大切な旧友より誘いを受け、このマガジンでの連載に参加させてもらうことになりました。

連載という文章寄稿をさせていただく中で「対人援助、心理援助とは？」という問いについて、私自身の旅を続けていければと思っています。これを読んでくださる方と直接お会いすることは叶わないのかもしれませんが、文章を通して、そのような旅を時に一緒にすることができたなら、大変嬉しくまた光栄に思います。それでは、どうぞよろしくお願い申し上げます。



## 奥野景子 新連載

大切なことはやっぱり、人とのやり取り

の中にあると思う出来事があった。出来るだけ、取りこぼしたくないと思うけど、取りこぼしたり、気が付けなかったりすることもあるんだと思う。「無駄なことなんてない」なんて言われてしまうように、大切じゃないことなんてないだろうなとも思う。でも、そのどれも拾い集めることは出来ないから、自分が大切にしたいことは何なのかを考えていきたいと思っている。

今回から連載を始めさせていただく奥野景子と申します。ぐるぐるもやもやしていることを自分なりにのこしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

## 馬渡徳子 新連載

いきなり私事で恐縮ですが、昨年の下半期に、三人も身内を看送りました。その合間に、子どもの結婚式に、家族の入院と手術が二件、最後にとうとう私も過労で救急入院しちゃいました。当然、葬儀が三回に、初盆が一回に、四十九日と百日法要が三回。お寺さんが本当に身近な存在になりました。

先日、とあるワークショップで、「今、はまっているもの」というアイスブレイクをしました。迷わず、「お経」という単語が浮かび、我ながらびっくりポン！キリスト者である私にとっては、お経が新鮮で、興味深く、何ともいえないあの節回しが、ぐっとくるんです。とうとうCDも購入し、二歳の孫も、はまって、すっかり節回しを覚えてしまい、勝手に踊りも創作し、お寺さんにスカウトされそうです。笑。

また、当然ながら、嫁ぎ先と実家の「相続」という体験もしました。そこで、まさにこれこそ「システム論」だなと実感した「素敵な出来事」について、4月に早樫一男さんにご報告しましたところ、「金勘定は、金感情」との名言を戴き、目からウロコがてんこ盛り!!「やっぱり、家族システム論を学んでいて良かった。」

そういえば、と、昨年、団士郎さんに「介護体験が、ひと段落したところで、三年ぶりに連載書いてみたら」と宿題を戴いていたことを思い出し、今回の投稿に到った次第です。

交通事故の被害者となり突然死した義父と、4年半の療養を経て病死した実

父。最期を看取れなかった家族の辛さと、「幻視」と「不眠」と「人を初めて『恨む』体験」をしました。

死因による社会保障関連制度の矛盾も経験しました。当事者団体ならではの「力」にも、改めて気付くこともでき、心より感謝しております。

この機会に、当事者体験とソーシャルワーカーであることも活かした視点で、つれづれなるままに、素直に率直に書きたいなと思います。

「父と義父の、看取りと、私への最期の宿題。今から、ここから」さあ、始めさせて戴きます。

## 柳 たかを

この春から新しく短期大学で週一回、マンガの授業を受け持たせて頂いている。12名の学生は全員アジア数カ国からの留学生。いまや、日本マンガは世界の若者に日本のサブカルチャーの代表として親しまれている。

外国人は日本という国をマンガを通じて知っている時代だ。受け持つ留学生の日本語レベルは学生によりまちまち、こちらはカタコトの英語まじりの日本語しか話せないで、数回の授業を経験してみても当方が学生に伝えたいことがなかなか伝わらず、学生の言わんとすることを私が正確に理解するのも簡単ではないということがわかってきた。

「母国の有名なむかし話から3つ選び、それぞれ題名と簡単なストーリーを書いて提出しなさい」

さしずめ日本人の私が学生なら「桃太郎」「浦島太郎」「かぐや姫」あたりを選び書くところだが、留学生が返してきた回答を見ると期待どおりむかし話を書いてくれた人もいるが、それとは別に殉死の風習、「(亡くなった)主人の体、火の中で焼くところに、(妻にも)行かせていました。今はそのことが、なくなってとてもよかった。」読んでみて目をむくような風習の記事だ。ネットを検索してみると確かにそのような記事があった。

そりゃまあ、世界の歴史を直視すれば珍しい話ではないのかもしれないが、、、冷静に冷静に。それはそれとして求めている昔話とは少しちがうなあ。

先生が書いてほしいのは主人公やわき役の出てくる民話・おとぎ話なのですよ。そのことをきちんと伝えたいのだが、「わからない!」「それならそうと最初に言えればいい!」と、ヘソを曲げられるのではないかドキドキしている。

これもマンガを介した異文化コミュニケーションなのでしょうね。

## 齋藤 清二

4月から、茨木キャンパスの総合心理学部に正式な所属が変わり、昼間は茨木キャンパス、夕方から夜は衣笠キャンパスという日が多くなった。それでも仕事量としては、まだ応用研のほうが多い。スクールバスを上手く利用すると、意外にスムーズに移動できる。立命館の総合心理学部の開設の影響で、今年の大学入試では、心理学部、心理学科希望者が前年比で20%も増えたということだ。医学部を希望する受験生が約30000人(合格者は8000人)、心理学部を希望する受験生は約20000人ということである。あらためて、“総合”心理学とは何か?ということを考えさせられている。

## 石田 佳子

マレーシアでは電化製品ひとつ買うのにも、予想外の展開が起きたりします。最近、家電専門店で電気オープンを買った時のことです。

<店員との会話:その1>

私「(最終候補に残ったマレーシア製のオープン①と欧米製のオープン②を見比べながら)①と②は、どこが違うんですか?」

店員 A「(じっくり見比べてから、どや顔で)大きさが違います」

私「(そ、そんな事は見ればわかりますけど…と思いながら)他には?機能とか使い方とかには、どんな違いがあるんですか?」

店員 A「(しんから不思議そうに)えっ?たぶん同じなんじゃないかな?」

<店員との会話:その2>

私「(これはあかんと思って、別の店員に)すみません、①と②の違いを知りたいんですけど?」

店員 B「(笑いながら)ああ、これ①!こ

れと同じ製品で昨日同僚の奥さんがクッキーを焼いていたら、爆発しちゃって大変だったんだって!(お腹を抱えて爆笑しながら)それ聞いて今日はもう、朝から皆で大笑いしてさー!!」

私「(ドン引きして)じゃあ、それと違う方②をください(u\_u)」

<店員との会話:その3>

店員 C「(②の新品を倉庫から出し、箱から出して正常に動くことを確認して)大丈夫です」

私「ありがとう」

店員 C「(品物を元の箱に戻そうとするが、発泡スチロールが入っているため上手く行かず、3人がかりでやっとなに戻して)はい、どうぞ」

私「(会計を終えてふと見ると、オープンのトレーが箱に入れ忘れられていることに気づいて)あのへ、トレーがないとオープンって使えないよね?」

店員 C「(照れ笑いしながら)ああ、そうね! f\_(:)」

…というやり取りが行われました。なんとか無事にオープンを買うことはできましたが、あきれ過ぎて可笑しくなり、『最後にドッチャンガラガラ…と大きな音がして、上から金だらいが落ちて来るのでは?(ドリのコントかい?)』と想像してしまう自分が居ました。

## しずてむ♪きよたけ

僕は、東京オリンピック・パラリンピックに先駆けた文化事業の一つ、「TURN」に携わっている。施設にアーティストが介在し、そこで生まれたものを形にしている「TURN フェス」が毎年行われる。2020年まで、なされる予定だそうだ。



僕は、応用人間科学研究科の東日本・家族応援プロジェクトに携わっている。2011年から10年続けることを掲げ現地の

コミュニティに団士郎家族漫画展といくつかのプログラムをもち地域に足を運んでいる。

ニュースを見れば、オリンピックに震災と経済にまつわることで相反しているかのような活動に身を置いている。そんな中、熊本・大分における震災。何も葛藤がないわけではない。

経済だけでなく政策があり、生まれる活動、現場で起きていることにより始まる展開。いずれも僕が、活動に身を置くことで葛藤していることである。

しかし、これまで、自分が行ってきたこと、今していることは何であるのか、見直しつつ、自分ができることは何かと考え、反発を受けることがあろうとも、やろうと決断した。なぜやるのか。やるなら何をしたいのか、そこが僕の決めてとなっている。葛藤は何であるかと言う現場と政策への自己の問いともいえ、決まっている中で、どうするのか、どうしたいかを実践に向けているのだろう。

ふと思った。このように考えるのはなぜか。僕はさまざまな事の始まりは思いがけないところから起きる。それは、周囲にいる人が携わっている仕事によるので必然性もはらんでいる。

自分に起きる予期せぬ出会い。そこには、コミュニケーションがあり、そこには、既にあるコミュニティがあるから起こる。また、関与する事でコミュニティの変容を知る。

今僕は、金沢に拠点を置いているが、月の半分は東京に住んでいる。家は、即決。ひよんなことから物件も見ずに決めたシェアハウス。不要になった板をもらい、酒屋でビールケースを買い取り、板を置いた。ここが、東京の僕の書斎。今、僕は、ここで書いている。

## 小林茂

いろいろ考えた末、増えすぎた仕事の再構築を目指し、4月から教会の牧師と幼稚園の園長の業務、それに外勤で札幌の精神科クリニックの心理士が仕事となりました。

この1週間ほど会議や外勤が続き、普段の生活の場から離れることが多く、車の走行距離のメーターが 1500km ほど上

がった。北海道での車生活に慣れたとはいえ、さすがによく走った。相変わらず多動の生活は変わらない。

1日あたりの仕事時間は改善されたが、1週間、1ヵ月では良かった感じがしない…。気づけば、家の敷地の雑草が伸び、マガジンの締め切り日も直前となっていた！

ソロー、H.D. や鴨長明に倣い、晴耕雨読の生活を理想としたいが道のりは遠いなあ。

## 水野スウ

4月に完成したばかりの、松井久子監督作品、ドキュメンタリー映画「不思議なクニの憲法」。けんぼうBOOKを書いたことがきっかけで、私たち親子もほんの少し、この映画に登場させてもらっています。

そんなご縁から、東京の映画館での初日に上京。上映後、松井監督とトークする舞台挨拶、というものはじめて体験。あ、もちろん、映画に出る、というのも初の経験でしたけど。

この映画では、登場する誰もが一一国会前で声あげる若者も、アイドルグループの10代の女の子も、北海道の「戦争したくなくてふるえる」デモを呼びかけた女の子も、主婦も、高校生も、自分の言葉で憲法を語っています。

もと外交官の孫崎享さん、憲法学者の長谷部恭男さんが、折々に登場。お二人とも、普段着の語り口調での解説がとてもぴったりの、すばらしい水先案内人さんです。

紛争解決人として知られる伊勢崎賢治さん、自民党の草案作りに関わった船田元さんも、この映画の中で重要な役割を担っています。

あすわか弁護士の堅ともこさんもあちこちタイムリーに登場して、「権力の暴走をとめるのが法律家の役目」「貧困と格差をなくすことこそ」と。

今の憲法を知るにはそのおいたちも、そして、戦前戦後の政治の歴史を学ぶ必要も、おおいにあり！とこの映画で痛感します。

観た後、観た人といっぱい話したくなる映画です。タイトルの、「不思議なクニ」っ

て、どういう意味？ということについてもね。

5月7日と8日、紅茶の時間と金沢で自主上映した後もやはり、みなさんといっぱい語り合いました。

全国でいま続々と、この映画のミニ自主上映会ムーブメントがおきつつあります。映画館でみるのもいいけど、参院選前にどうか、あなたの町で、あなたのおうちで、この映画みてくださいな！って私からもお願いしたいです。



「不思議なクニの憲法」公式サイト

<http://fushigina.jp/> で、上映方法や、各地の上映会予定など、どうぞチェックしてみてくださいね。

\*\*\*\*\*

今回の上京中、娘から初の出前注文を受けて、「きもちは、言葉をさがしている」というコミュニケーションワークショップを2回しました。定員8人のごくこじんまりグループのワークを、彼女の家のひと空間で。

去年あたりから娘が、憲法カフェによく行くようになり、そこで語られた話を、自分のまわりのみじかな人たちとも語りあいたいの、それがどうしてこうもむずかしいんだろう、“せいじてき”とされる話を自然にしにくいのはなぜだろう。そんな話をしあうには、どうやら、コミュニケーションの練習も必要らしい、と娘が感じはじめた時に、私が以前からそんなワークショップしていることをふと思いだして、ここでもそれをしてくれない？とリクエスト。

集まった人たちは、娘がこの1年間に紡いだひとネットワーク。そんな人たちとする、自分にも相手にもきもちのいいコミュニケーションのとり方を練習する時間は、私にもとても新鮮でした。

短い時間のコミュニケーションワークだけで、すぐに政治の話がしやすくなるわけじゃむろんないけど、自分という存在が大切にされる感覚、話す／聴くの関係性、自分のコミュニケーションのくせ、私メッセージとあなたメッセージの違い、上から目線では伝えたいことは伝わらない、言葉の選び方のヒント、などなど持ちかえてもらえたら、もうそれで十分です。

娘は、自分には「ふだんの努力」の大きな12条はなかなかできそうにないけど、すきま産業ならぬ、大きい12条と12条の間をうめる「すきま12条」くらいなら出来るかも、と考えているようです。

そういうことをしていく場所として名づけたのが、「ことこと4畳半」。いわゆるせいてきな話を人とする時に、たいいて感じるきもちの段差。その段差をすっきりとなくせないまでも、せめてゆるやかなスロープにしていきたい。そんな話をしあえるささやかな場所としての、このネーミング。ちなみに、「ことこと」の由来は、個人と個人がCo=ともに、という意味からきているとのこと。

こんな場で、民主主義の種がいつか芽吹いていくといいな。話すことと、と、聴くこと、これがもっとも大切な民主主義の基本、と思っている私なので。

## 高垣愉佳

ラホヤ村通信をスタートして8回目の原稿提出。早2年が過ぎました。お伝えしたいネタはたくさんあるのですが、ラホヤ村通信は次回の9回目をラストに、そろそろ次のステージへ移りたいと考えています。最終回の次回は、アメリカ生活お役立ち特集にでもしようかなとぼんやりと考えてつ。

## 浦田雅夫

京都府より委託を受けている退所児童等のアフターケア事業。拠点を三条会商店街近くに移し、サロンドツキイチも開催しています。全天候型京都最長アーケード「三条会商店街は今日も熱いです」熱気ムンムン。詳しくは、facebook Minuet Kyotoaftercare まで。

## 早樫一男

年齢を重ねると共に、身体のあちこちに

痛みを感じるようになりました。そもそも、運動不足が大きな要因だと思います。一方で、大きな病気になったことはありません。この年齢まで元気に過ごしてこれたのは不思議なことです。「先祖のおかげ」などと言うつもりはありませんが、今回の連載は我が家のジェノグラムに焦点をあててみました。

## 中島弘美

対人援助学会研究会の準備等のお手伝いをさせていただいていると、楽しいことがあります。まずは、さまざまなゲストスピーカーの方とお会いできて話をうかがえること、そして参加者の方との交流があります。さっきまで、「はじめまして」だったのが、二時間後はちょっとしたつながりができます。

これまで、ゲストスピーカーをお願いすると、快く引き受けて下さる方が多いのですが、毎回すんなりと話が進むとは限りません。日程が合わなかったり、会場が空いていなかったり、依頼の仕方がまずかったように思うこともあります。しかし、さっぱりと断っていただけると、どのような条件を整えればお引き受けいただけるのかわかります。

また、こんなに魅力的な内容だったのに、もっと多くの方に聴いていただければよかったと思うこともあり、宣伝方法についても、もうひと工夫できないかなあとくり返し考えています。

今回の研究会は、以下の通りです。

ひさしくお越しいただいていない方も、どうぞ。心よりお待ちしております！

### ■ 対人援助学会 研究会 ■ 第18回のご案内 ■ テーマ:「熊本での震災

ボランティアを経験して」  
ゲスト:酒井 良輔 (元精神障害者福祉施設 スタッフ)

日時:2016年6月17日(金)

19:00~21:00

場所:キャンパスプラザ京都 6F  
第1会議室

※無料でどなたでもご参加頂けます。

## 藤信子

今年は、近衛の糸桜を見て、次の週に藤右衛門さんのところでしだれ桜を見て、大覚寺へ行きソメイヨシノを見たことで、桜を見るのが終わった。いつもの年はそれから紅しだれをどこで見ようと思うのだけれど、予定がたたなかった。今年の桜は糸桜から、しだれ桜、ソメイヨシノと各種の間が空かずに、次々に咲いたから何か忙しいような気になった。そうする内に家のそばの檜の並木が、いつもは5月の連休の頃に葉が広がりはじめるのだけれど、4月半ばにはそうだった。花や木の時期が急いでいるようで、何が影響しているのだろうか人と話すこの頃である。

これを書きながら、確か1年前のプロフィールにも近衛の桜などのことを書いたことを思い出した。4月の初めに桜のことを一番気にしているのは、年をとったせいなのだろうか考えている。

## 中村周平

一昨年の夏、現在住んでいるアパートに引越しました。お世話になっているヘルパー事業所が建てられたバリアフリーアパートです。車いすユーザー…とくに大きめの車いすを使う人間にとって引越は厄介？すぎるイベントです。バリアフリーの点から引越可能な物件が少ない。何か不便な箇所を直そうと思えばお金がかかる…それを出る際にも直すので(涙)。なので、現在のバリアフリーアパートは非常に住みやすい環境でした。ただ、ここもこの夏には引越さないといけない状況にありまして。次はどこに…今年の夏もせわしないことになりそうな予感です。

## 浅田英輔

毎年、年をとっていく。4月生まれなので、年度が変わるとほぼ同時に年をとる。こないだ抱っこしていた子どもたちも、かなり大きくなった。身長はまだ息子のほうが小さいけれど、息子の足のサイズは28センチになった。私は26センチだ。高校生のころ、父の革靴を借りて履いていたことがあったが、息子とはもうそれができない。それくらい、年をとったんだなあ感慨深い。今の身長は、父(私)が178セ

ンチ、息子は 171 センチ。中学生の間は服を貸してあげられるかもしれない。高校生になると、越されるだろうなあ。あと 1 年半と思うと、感慨深い。思っていたよりも、遠くにきてしまっているようだ。でもまあ、来た道を戻るよりは、もうちょっとだけ進んでみようかと思う。

## 中村正

法務省の法制審議会刑事法部会に呼ばれて意見を述べた(2016年5月25日)。そこでの内容はいずれ議事録としてアップされるが全体としては厳罰化といえる刑法の今次改正への批判的意見を述べた。今回は性犯罪関係の改正である。強姦や強制わいせつ等を非親告罪化すること、強姦の法定刑の下限を3年以上から5年以上に引き上げること、監護者等による性犯罪についての罪をつくること、肛門や口腔をもちいた男性から男性への暴力を強姦罪に含めること、集団強姦罪を削除すること(強姦等を5年以上にするのでそれで十分)等についてである。よい面もあるが、全体としては重罰化なので、更生には否定的な影響をもたらすと意見を述べた。さらに、いずれ出所する人たちなのでその人たちが生涯かけて犯罪から離脱することへの刑務所以外における更生の取り組みが組織されるべきことを主張した。法の解釈に関心がある方々なので、こうした心理的社会的取り組みの話にはどの程度関心をお持ちかは不明だ。本マガジンの執筆者や読者はその点、安心できる。心理的社会的課題に関心をもってきているからだ。そしてそうした相互了解のある場を「関心のコミュニティ」という。よい聞き役がいると思うと話も弾むが、その審議会の関心は法的解釈なので、なかなか難しいコミュニケーションだった。



## 牛若孝治

「資格・免許」というものに胡坐をかいてはならない。白い杖を持って外出している、よくこんな声の掛けられ方をする。

通行人:「私、ガイドヘルパー(視覚に障害のある人たちを目的地まで誘導すること)の資格を持っているのですよ」

私:「それがどうしたんですか?」

通行人:「いや、「だから安心して歩いてください」という意味で」

私:「あなたがガイドヘルパーの資格を持っているかどうかなんて、僕にはまったく関係ないですよ。悪いけど、ガイドヘルパーの資格を持っていなくても、手引きの仕方がうまい人はいっぱいいますよ」

通行人:(少々困惑気味で)「そうですか。では、あっちの方向に目的地が見えています」

私:「あっちってどっちの方向ですか? あなたは、ガイドヘルパーの資格を取ったときに、「視覚に障害のある人たちには、あっちとかこっちなどの指示語を使わないようにして習わなかったのですか?」

通行人:「はい、どうもすいませんでした」

私:「「資格」とか「免許」というものに胡坐をかいては、それ以上技術が向上しないってことを、もっともっと勉強してくださいね」。

## 袴田洋子

締め切りを数日過ぎてしまって、すみません。今日は、5月29日。6月1日から、自分の新事務所でお仕事を始めます。と言っても、内容は変わらず、介護保険のケアマネジャーの仕事ですが、きっとこの事務所での仕事が、自分が引退するまで働く職場になるでしょう。今、48歳だから、あと20年くらい? 今回は、夫婦げんかの話を書きました。けんかをきっかけに、夫婦システムが、変わりました。雨降って地固まればいいんですけど。

## 団遊

歯の調子がいい。48時間虫歯菌増殖説を信じ、頻回の歯磨きよりも徹底した一回を重視するようになったからだと思う。ことの起こりは1年ほど前。近所

に予防歯科ができ、そこが評判だと聞いた。早速行ってみると、過診療ではないかと疑いたくなるくらいにあらゆる検査をしてぼくの歯のカルテが作られた。その後歯磨き指導をされ、さらに歯とは何か、彼が信頼する北欧のメソッドとは何かという講義(?)も受けた。その大半は忘れてしまったが、ぼくのこれまでの常識を壊してくれたのが「1日3回歯磨きしても虫歯対策には無意味です」ということ(口臭予防とかりフレッシュの効果はあると思う)。虫歯菌は、付着後48時間で増殖を始めるので、虫歯対策を考えるのであれば、48時間毎に一回10分以上をかけて徹底的に磨くのが一番効果的だ、と言ったのだ。そこで、1日1回~1.5日に1回くらい歯磨きをし、その際は歯間ブラシも活用し徹底的に磨く、一方口臭とリフレッシュにはフリスク系で対応とするという風に生活リズムを改めた。その結果、ほんとに歯の調子がいいのです。もう一つ分かったのは、10分以上歯磨きしようとする、手磨きでは腕が疲れ果ててしまうので、電動歯ブラシが必須だということ。次に虫歯ができるまでは、このリズムを続けようと思います。

## 大石仁美

昨年ホームページをプロに更新してもらって、スマホで検索できるようになったことで、今春の入会者が激増し、驚いています。嬉しい悲鳴を上げていると言いたいところですが、どこかで打ち切らなければ対応出来なくなるという不安も大きいです。動けるスタッフの数と部屋のひろさ、それと、会員の中の手のかかる0~2歳児の占める割合をにらみながら、ストップをかけるタイミングを模索しているところです。

## 村本邦子

熊本へ向かう新幹線の中で、偶然、東北支援をされているハワイの知り合いもちようど熊本に入ったところだと知った。前回の短気で「焼きそばを焼いている」と書いた人だ。今回も東北のあちこちで焼きそばを焼いた後、義援金を持って熊本に来たのだという。この義援金は、先日、ハワイでチャリティイベントをやって集めたもの。

うちの息子もラップで参加したと言っていた。自分の予定を終えた後、急遽、彼と合流し、彼が関わる避難所について行った。彼はすでにそこでニーズを聞き、義援金で実物を調達して贈っていた。きめ細かな良い方法だ。来月はまた、500食の焼きそばを焼きに来るそうだ。避難所では、毎日、パン、おにぎり、コンビニ弁当というメニューなので、焼きそばは喜ばれる(とくに彼の焼きそばは抜群においしい)。最近、食中毒があって炊き出しを禁止にした避難所が多い中、ここは禁じなかったようで、良かった。終了後、熊本駅に向かうと、なぜか構内でフラダンスをやっていた。相変わらず不思議なことが続く・・・。

## 國友万裕

先日、5年ほど前にお世話になったある女性から Facebook の友達リクエストが来ました。しばらくお会いしていなかったのですが、このまま疎遠になってしまうかと思っていたのですが、偶然、「男は痛い！」を読んで、ぼくのことを思い出してくれたとのことでした。やはり、連載を続けていると誰か読んでくれる人がいるんですね。とても嬉しいことでした。

ぼくが「男は痛い！」で書いていることは、全部実話ですが、自分の身に起きることのすべてを書いているわけではありません。本当はもっと書きたいことはあるのですが、公の場でそうそう差し障りのあることは書けない、しかし、ある程度は激しく書けなかつたら、自分の思いは伝わらない、そのジレンマの中で、どこまで書こうか、どこまで書けるか、悩みながら書いているという状態です。

そのうち、中村先生にも協力してもらって、「男は痛い！」を本にできたらなあと思っています。じっくり練って、大幅に書き換え、連載では書けなかつたきわどい(?)話もたっぶり書いて、拙著『BL 時代の男子学 21世紀のハリウッド映画に見るブロマンス』の日本映画版にしたいと考えています。とはいうものの出版不況。まだ何もあてはないのですが、希望は常にもってきたいですね。

もっと読んでくださっている人たちの感想を聞きたいです。よかったら、Facebook にメッセージください。

## 北村真也

認定フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」代表。(http://tiseikan.com)

今回で一旦「学びの森の住人たち」は最終回となります。次回からは、また新しいものをスタートさせますね。よろしく!!

## 古川秀明

「保護司のおっちゃん」の歌を歌うと、必ず女性の保護司の方から「保護司のおばちゃん」という歌はないのか?と聞かれる。きっとお愛想で言ってくれるのだろうと思っていたのだが、あまり何度も言われるので「保護司のおばちゃん」の歌も作って歌ってみた。これもなかなか気に入っている。  
シンガーソングカウンセラ―



## 西川友理

京都西山短期大学で講師をしつつ、色々と学生支援に関わる事をさせていただいています。

この職場に移って2年目に入りました。去年は何もわからずオロオロと周囲についていけただけだったのですが、今年は自分で出来る事、やりたいと思ったことをどんどんやっついこうと動いています。「こんなことしたいなあ」と頭で考えるだけでなく、周りの人に話をし、実際に書類を作って、学生に呼びかけて…出来るかどうかかわからない事も、とりあえず行動に移せば、何かが動かし、誰かに響く。

「とりあえず行動する。うまくいけば成功だし、うまくいかなかったらそれは失敗ではなく、学びである。」という言葉に胸に、何事も行動に移していきたいと思っています。

## 坂口伊都

5月だというのに暑いですね。皆さま、暑さにも負けず、お過ごしでしょうか。

私事ですが、生まれて初めて全身麻酔で手術を3月にしました。1週間程入院し、その間、夫は職場から夜勤を免除してもらえて、何とか乗り切れました。入院中、中学生の娘は部活が終えてから電車とタクシーを乗り継いで来てくれましたが、娘が一人でタクシーに乗るなんて初めてだったので、待っている方は時間が長く感じました。

里子の息子は、土曜日に兄に連れられて病室にやってきて、父が迎えに来るまで一緒に過ごしました。高校生の息子は、弟を病院に連れて行くミッションをしてくれましたが、母の様子は全く気にしていない様子。「大丈夫」の一言もなく、弟を置いて遊びに出かけていきました。はあ、ため息が出ます。

入院中、お腹の傷が痛み、手でお腹を押さえながら「いたた」と言いながら歩いていると、里子の息子が何気なく歩調を合わせてくれました。ベッドを乗っ取られましたが、病院の金魚を見たり、売店に行ったり、クラシックコンサートも付き合ってくれました。

手術から2か月が経ち、元気に過ごしています。看護師さんからは、思っている以上に身体に負担がかかっていますからね、くれぐれも無理はしないようにと言いつ渡されたので、用心して過ごそうと思いません。

## 河岸由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ

かかし 主宰

片付け:最近、家の中を片付け始めた。別に断捨利ということではない。忙しさにかまけて、中々手を付けていなかったところに、手を付けはじめただけである。

まずは書類。これは連休に頑張った。長年の間に溜まった書類を思い切って6割くらい捨て、かなりすっきりした。

次に子ども部屋へ。子ども達が置いて行った物を整理する。玩具やぬりえ、ぬいぐるみ、絵本や子供向けの本。中には私が子どもの頃を買ってもらった絵本もある。

そんなものを一つ一つ見ていると、思い出がいっぱい出てきて、片づけが進まない。

今の家に住んで25年。引越しをしないと物が溜まる。元来物を捨てられない性格なので、異常に物が多い。その性格が子どもにも遺伝していて、壊れたおもちゃの部品や石ころの果てまで残されている。大人にとってはガラクタでも、当時の子どもにとっては宝物だ。

そんな物を時折、写メにとって子ども達に捨ててよいか確認する。

入院ばかりしていた末娘の物は、特に多いが、扱いが良いので玩具の部品がすべてそろっている等、びっくりすることもある。長女も比較的物を大事に扱うので、壊れている物は少ない。雑だったのは次女。あれこれ分解してしまうのでバラバラ。しかもカササギの様に光物が大好き。河原で拾ったガラスなども宝物だ。おもちゃを見ていて、三人の性格が良く分かる。大人になった三人の性格は、むしろ逆になったように思えるので不思議。

玩具を寄付したり、職場に持って行ったり、捨てたりと、楽しいような寂しいような、そんな思いで、暇な時に蟻が引いて行くように、少しずつ少しずつ片付けている。

## 岡崎正明

最近話題の2人。サッカーの岡崎選手とカーブの新井選手がすごい。

どちらもあふれる才能ときらびやかなキャラで成功した人ではない。粘り強く泥臭い全カプレーが身上。正直イマドキのスマートとはちょっと違う、昭和な香りのするタイプ。そんな2人がたて続けて脚光を浴びた。今年の流行語は「努力と根性」か「泥臭い」だろうか？

「臭い」つながりで思い出した話を。先日、用が足したくなってコンビニのトイレを借りた。新しい店舗で、車いすでも使える広くてきれいなものだった。

「ラッキー」と思って便座に座ると、ジャバジャバ〜つといきなり水音が。いわゆる音姫機能。「別にこっちは必要ないのに、自動で鳴るなんてご丁寧な」しばらくしたら止まるかと思っていたが、30秒経っても40秒経ってもジャバジャバいい続ける…。よく見ると便座の横の操作盤に「水音停止」のボタン。なんで鳴るの前提？と軽く

イラツとしながらボタンを押す。

ようやく室内が静かになったかと思うと、今度は「カチツ」という微かな音と同時に照明が消えて真っ暗。おいおい。両手を高く上げると、センサーが反応して明かりがついた。やれやれ。しかし5秒もしないうちにまた「カチツ」…。はあ？少々体を動かしたくらいでは反応しないようで、その後ずっと両腕を伸ばしてぐるぐる回しながら踏ん張ることに。



おそらく便利を考えて作り出されたであろう自動センサーに、踊らされながら排便する人間。こんなに無様なことがあるのか。これではもう、どっちが主だか分からない。「言う通りしますから動いてください、コンピューター様〜」「ガハハ。ソレ、オドレオドレ」私には機械の高笑いが聞こえた気がした。

なにかと世の中にはびこっている全自動化だが、正直「それくらい自分でさせて！」と思うものが結構ある。特にトイレはその宝庫で、近づいたらフタが開くとか、便座から立ったら勝手に水が流れるとか。おかげで何度無駄に驚いたり、センサーが反応しないよう工夫した動きをしたことか。誰に気を使うこともないはずのトイレで、機械の動きに振り回される時代がくるとは。手塚治虫も想像しなかったに違いない。

対人援助もトイレ利用者のニーズも、あまり先回りして手取り足取りするのは、人間をダメにするんじゃないかと思うのは、私だけだろうか(共感した方のメッセージお待ちしております)。

[buiem0412@yahoo.co.jp](mailto:buiem0412@yahoo.co.jp)

## 千葉晃央

国家資格社会福祉士の養成課程の教務主任になって、9年目になった。担当科

目も複数あり、この養成課程だけでも年間100時間以上授業をしている。そんな生活になって9年ということである。

これまで、家族療法、システム論、構築主義、ナラティブ、ソリューションフォーカスド、行動療法、ユースワーカー論…などの自分が大切だと感じる複数の考え方に会うたびに、自分が学びたいように学んで楽しんできた。そんななか社会福祉士養成課程の相談援助の科目の授業でも、最初に話すのはフロイトさんの話。ソーシャルワークでもフロイトさんの影響は強く、そのソーシャルワークの一定のベースを作ったといえる。超自我、自我、原我の話をして、それがどのように後年の人々によって発達していったのか？はコミュニケーションを扱う援助職には欠かすことができない視点だと思っている。その理論が交流分析にまでどうつながったのか？そして、知的障害者領域における利用者との援助者のやり取りを精神分析的に捉えた場合はどのようにみている意見があるのか？をいつも話していく。こういう視点をほんまに知ってほしいとつくづく思う。対人援助の基礎資格である社会福祉士の課程で伝えたいことは①常に学ぶ姿勢を持ち続けること、②社会福祉士はえらいというプライドを持たないこと、③わからないときに聴くことができる仲間を持つこと、④しょうもない「イジワル心」は持たないこと、⑤実際に足を運び、多くの人に会うこと、⑥正しさよりも結果を大切にすること、⑦どんな状況もたのしむこと、⑧人生は長いので短期的視点ではなく長期的視点を持つこと、である。こんな対人援助職になってほしいと願い、プログラム作成に苦心をしている。

## 大川聡子

3年と9か月におよんだ連載も、今号でとうとう終了となります。思えばこの間、著書を出版したり、職場では職階が変わったり、家庭には未就学児がいなくなったり等、色々な変化がありました。博士課程在学中は、博論が最大の関門のように思っていたのですがそんなことはなく、その後もたくさんさんの難関はあり、でもそれを超えないと新しい景色は見えないのかなと思っています。

これからも、援助職の方々にはあたりまえに認知され言語化されていないハツとするような実践や、こういう対象にこんなアプローチをしたらどうだろうか、といったような挑戦的な実践を広めていくお手伝いのできたらなと思っています。

これから連載をと考えていらっしゃる方がもしこの原稿を読んでいただいていたら、ぜひ始められることをおすすめします。私の原稿の基となっているのは博士論文で、一部の内容は論文化もしているのですが、これまで講演を依頼していただいた方は、対人援助学マガジンで私の原稿を読んでいただいた方がとても多いです。WEBに掲載されることで、若いお母さんの子育て実態や、それを踏まえて私が考えたこと、したいことを知っていただく機会が大きく増えたと思います。何かを誰かに伝えたいと思う方がいらしゃったら、マガジンはおすすめです♪

編集長ならびに編集委員の皆様には、長い間本当にお世話になり、ありがとうございました。

## 大谷多加志

4月から現職のまま、週に1度だけ大学院でK式の授業を担当するようになりました。これまでは職場の講習会などで「K式を学びに来た人」に向けてしゃべっていたわけですが、今度はそういう人もいれば、とくに興味はないけれど単位としては取らざるを得ず来た人もいるはず。検査に関心がある人もない人も、子どもや発達に関わる仕事を志す人もそうでない人もいろいろな人がいる中で、何を伝えることができればよいか。試行錯誤中ながら、子どもの世界を想像することを通して「自分が当たり前と思っていることを疑うこと」を体験してもらえたらと、今は思っている。自分の枠を外して考えることは、きっとどんな現場でも役に立つと思えるから。

## 竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

先日、60歳になった。40歳の時に自分の人生が折り返しだと思った。自分の人生の転換期だった。自分の意思を確認しながら生きてきたつもりであるが、わがままに生きてきたただとも言える。周りの

人たちに迷惑をかけてきたことだと思う。しかし、それを指弾する人もほとんどいなくなった。

◆昨年に亡くなった恩師である山田明爾先生は、「俺は何一つ作ったことがない、誰かの役に立ったこともない。自分の好きな事だけして生きてきた」と言っていた。私は「自分の好きな事すらできていない」と思ったものだ。先日、ホームレスの食糧支援をしながら、「ホームレスも私も通行人の邪魔になっているなあ」と思った。私の存在や行為は社会に貢献するどころか、誰かの邪魔になっている。世の中に迷惑をかけているけれど、自分の好きな事をして、この先を生きていきたい。先は分かんが、まだまだ長く生きるつもりである。まだまだやりたいことがいっぱいある。

## 川崎二三彦

### 人口増加

4月中旬から、正確には熊本地震の前夜から、我が家の人口が一時的に増加して生活が一部影響を受けている。増加の要因は、生後1週間の女兒とその母親が、ともにやって来たことによる。

この母子に1階和室を明け渡しても、居住空間的に特に支障はなかったし、夜中に台所でごそごそミルクを作る物音がしても、2階寝室にまではそれも届かず、私は眠りこけているばかり。ただし、連れ合いの求めに応じて時々ベビーショップに足を運び、3~40年前との違いに時代の移り変わりを感じるとか、日常の時間が何かと賑やかになるような変化は現れた。



とはいえ、滞在が長引くにつれて、用もないのに和室に出向いてまじまじとベビーの姿を見つめたり、たまには抱いてあやし、さらにはミルクを飲ませてみるなど、想定外の行動をとる自分自身を発見して驚いた。

ところで、私は今、嬰兒殺研究を行って

いるのだけれど、たとえば生後1か月の子どもが泣き止まないとして暴力を振るった父親のことを考える際など、現在の境遇が大変参考になる。

「ははーん、生後1か月の子は、こんな泣き声なんだ」

と思いながら、暴力をふるった父親の気持ちを推し量るのである。ただし、どうしてそんな暴行に及んだのか、かえってわからなくなるということもあるのだが……。

(2016/05/28 記)

## 荒木晃子

先日、京都国際社会福祉センターの社会福祉講座で話す機会があった。事前に提示されたテーマは「家族という発達の場を支える実践」。筆者の講演タイトルは、「生殖医療が問う家族の選択と決断—福祉・医療・行政の連携から—」とした。パートナーと共に子どもを迎える家族形成を「家族の発達」ととらえた援助システム「島根モデル」の取り組みの話である。不妊家族臨床が専門の筆者のことゆえ、結婚＝妊娠＝出産→楽しく子育て、などと順調な話をする筈もない。おそらく、150分の講義中、結婚・妊娠・出産などという“おめでたい”キーワードは、ほとんど口にできなかったと記憶している。代わりに熱く語ったのは、不妊、精子・卵子の提供、代理出産、LGBT などなど。家族の発達を考えたとき、誰もが考えることのない(というか、考えたくもない)、家族の発達過程に派生する“子どもの課題”を扱ったのである。まさに、家族という発達の場に、他者からの支えが必要な対人援助の話である。当日、熱心に耳を傾けてくださったスタッフを含む、社会福祉士を目指す数十名の老若男女の参加者各々が、自分のこととして、また、我が子をそこに重ねて一考していただけたのではないかと思う。あの日、会場から筆者に注がれた視線が、いま、そう語らせてくれる。

## サトウタツヤ

2016年4月になって、肩書きが変わりました。

文学部教授→総合心理学部教授  
研究部長→総合企画室長/学園広報室長



だから何だということもないのですが、気分を変えて頑張っていきたいと思えます。総合心理学部の上で作る大学院についても、展望が見えてきました。

TEA(複線径路等至性アプローチ)は、色々な展開があり、今年度中に、英語の本、日本語の本、それぞれ1冊ずつ出版されそうです。

## 見野 大介 みのだいすけ

京都高島屋での個展も無事終わることができました。自分の中の「陶芸」の可能性が一層広がった、そんな手応えを感じた一週間でした。作りたいもの、作らないといけないもの、これから一つ一つを丁寧に作っていきます。

### 【陶のかたち展】

会期:2016.6.14-6.26 11:00-18:00(最終日17:00まで・月曜休廊)

会場:GALLERY 北野坂 神戸市中央区山本通り 1-7-17 WALLAVENUE2.3.4F

30人の陶芸家による、30人それぞれの表現によるオブジェ・うつわが展示されています。

### 【見野大介 梶本直子 -陶硝子展-】

会期:2016.7.6-7.17 12:00-19:00(最終日18:00まで・11.12 休廊)

会場:町家 Gallery cafe 龍 京都市紫野下石龍町 3-5

日用的な器から嗜好的な器、硝子のような陶、陶のような硝子、偶然の出会いによる異素材の展示です。

## 鶴谷 圭一



今回の原稿を書いている時期、沼津市の私立幼稚園協会と静岡のFMラジオ局K-mix(ケーミックス)、そして趣旨に賛同して協賛してくれた企業がブースを出展し、6月11日にイベントを行います。マガジン

25号が発行された頃には終わっているとありますが、題して「おやこんぼフェスタ2016in キラメッセぬまづ」

沼津にあるイベントホールを借りて、午前10時から午後3時まで、200人の幼稚園教職員も動員して、約3,000人の集客を狙っています。我々は幼稚園の振興とおやこんぼの普及、企業は親子世代の取り込みと、双方の思惑が合致しての初の試み。現在ラジオで「おやこんぼ！」が連呼されておりイイ感じです！

ただ、本来の幼児教育以外の業務が多量にあるので、あちこちから連絡が入り、対応せねばならず目が回るようなハブ空港状態となっております。(@\_@)

おやこんぼってなに？と思われた方は、ぜひマガジン9号をごらんください。

こちらの HP でも→

<http://oyacombo.net/>

原町幼稚園

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

## 木村 晃子

編集長、ごめんなさい。25号のマガジン、お休みさせていただきます・・・

5月初め、今号の締切り案内を頂いて間もなくのメールです。拙いながらも、創刊号から、執筆エントリーさせていただいている自負もあって、連載ストップはこれまで考えたこともありませんでした。私にとっては、「書きたい。書かせてください。」とお願いして始まった、対人援助学マガジンです。決まった枠組みがあると、24回も継続できている、と嬉しくもありました。その大切な連載から、一旦ドロップアウトを決断しました。その前段に、大きな別れがありました。大切に、大切に育んできたものを失ってしまったのです。恥ずかしながら、心も体も壊れてしまいました。元気だとか、パワフルだとか形容されることの多い私ですから、壊れた私は自分ではないような感覚でした。

けれども、そのうちに、体の方は回復に向かいました。そして、体が回復したのだから、結局、25号も書く事にしました。心はまだ、あの時のまま、悲しみを背負ったままですが、今できることをしていくことで

しか、未来は築くことはできないと思いがら、いつも通り今号も連載を続けることができました。マガジンの中に、自分の居場所があることが特に嬉しく感じた今号です。私にとっても、記念すべき25号となりました。

北海道 ケアマネジャー

## 乾明紀

前回の短信に「今度は腰痛と乾燥肌に悩まされることになりました」と書きましたが、腰痛は治りましたが、肌の痒みがまだ治まりません。乾燥する季節はとつとつ終わったのに・・・

以前に長期間悩まされた「歯の痛み」に比べるとマシと言えますが、発疹は原因がわからないのが厄介です。皮膚科に行っても対処療法でステロイドなどをもらうだけで、根本原因が何かは依然わからない状況です。今日、同じ悩みを持つ先生が、「研究室にある本のカビが原因だと思うようになってきたわ」とおっしゃってましたが、何が原因なんだろう・・・

## 団士郎

前回書いた内村鑑三つながりの続きです。5月22日(日)、大阪難波のジュンク堂書店で、「高尚なる勇ましい生涯—内村鑑三と「代表的日本人」—と題した講演会があった。

「悲しみの秘儀」の著者であり、Eテレ「百分で名著:内村鑑三—代表的日本人」の解説で知った若松英輔氏が登場とあって、上手い具合に予定の入っていなかった私は、勇んで出かけた。

書店の一隅に椅子を並べて、書棚の森の中で話を聞くのはとても気持ち良かった。そして若松氏の話はとても面白かった。

話すことが好きであった内村鑑三を語る氏も又、話すことが好きなようで、同類の私には好ましかった。

内村が「日本中、二人以上居てくれれば、どこにでも話しに行く」と言っていたというのには笑ったし、実際、日本中出かけていたらしい。そして、もう少し聞いてみたかったのは、聖書研究雑誌を刊行し続けていたということである。

それは「対人援助学マガジン」を発行し続けている自分に引き寄せて、よく理解できる行動であり、次の時代への地ならし、準備こそ、自分が生きることであると考えていたというのは心に浸みる話であった。

終了後、持参の「悲しみの秘儀」にサインをして貰った。その時、東日本大震災被災地を中心に5年間、発行配布し続けて

いる「木陰の物語」小冊子を手渡した。

その後、余韻を楽しむべく、近くのカフェで一息つきながらツイッターに会場の写真と感想をアップした。

すると帰路の車中、ツイッターに若松氏から返信があった。そして更に、新幹線の車中から、小冊子「木陰の物語」の感想を届けて下さった。

伝わるものがあるに違いないと思って手渡した冊子が、そのような役目を果たしてくれていることの幸福は何ものにも代え難い。

(ネット写真欄から持ってきたこの新聞記事。出版されたものから 2011 年の記事らしい)



「井筒俊彦は読むことが書くことに劣らぬ創造的行為であると教えてくれた人です。誤読を恐れず読むことから、豊かな実践が始まります」

世界的イスラム学者・言語哲学者として知られながら、国内では「つまみ食い的な紹介しかなかった」井筒（1914〜93年）。その著作と生涯を丹念に論じ、知的軌跡を生き生きと描き出した第1作「井筒俊彦 叢知の哲学」（慶応義塾大学出版会）を5月に発表、大反響を呼んだ。第2作「神秘の夜の旅」（トランスビュー）の刊行を記念して9月、井筒をはじめ私淑する思想家・文学者をめぐる連続講演会が計4回、紀伊国屋書店など大型書店で催され、一躍出版・読書界の寵児に。

本業は数十種類のハーブを調合した健康食品を製造・販売する中小企業経営者。私にとってビジネスと書くことは不可分。自然が育んだハーブを消費者のもとへ運ぶのと同じように、井筒から預けられたものを、必要とする読者に届けているだけです。ビジネスマンに対しては、井筒やフロンなどの精読を真剣に勤める。「持続的な事業展開を望むならば『存在の深み』からの思考が必要です」

「叢知の哲学」のもとになる論文を雑誌連載中、妻を亡くした。「執筆は、目には見えないけれども隣にいる妻との『協同』作業でした。読者には私の本を通じて井筒本人と出会ってほしい」。死者の存在を信じるカトリック教徒でもある。

文・伊藤一博  
写真・三浦博之

井筒俊彦の本格的評伝を書いた企業家  
若松 英輔さん(43)

新潟県糸魚川市生まれ。慶応大卒。シナジーカンパニージャパン社長。「三田文学」に「吉岡義彦」を連載中。

ひと